

「康德帝」溥儀の即位儀礼と内藤湖南の見解

— 国立国会図書館所蔵の斎藤実首相宛書簡について —

陶 徳 民

Naitō Konan's Views of the Kangde Emperor's Enthronement Rituals as Seen from His March 25th, 1934, Letter to Prime Minister Saitō Makoto Preserved at the National Diet Library

TAO De-min

When the Chief Executive of Manchukuo (established on March 1st, 1932) Puyi learned that he was going to be crowned Emperor on March 1st, 1934, with the new reign title of Kangde (Wade-Giles: Kang-te; 康德), he insisted tenaciously to wear the “dragon robe” passed down from the Guangxu Emperor during the ceremony in order to show the restoration of the Qing dynasty. But the Commander of the Japanese Guandong Army rudely directed him to wear the Western-style military uniform in order to declare the birth of a new empire. In a compromise, both rituals were performed. Based on Puyi's autobiography, Yamamuro Shinichi's critical analysis, and Naitō Konan's article in the *Osaka Mainichi Shimbun* newspaper dated January 21, 1934, and his letter to Prime Minister Saitō Makoto dated March 25, 1934, the present research note reexamines the controversial historical event and the concerns of Naitō Konan as a prominent historian of Manchuria and an opinion leader on the affairs of Manchukuo.

キーワード：満洲国 (Manchukuo), 康德帝 (the Kangde Emperor), 即位儀礼 (Enthronement rituals), 内藤湖南 (Naitō Konan), 斎藤実 (Saitō Makoto)

国立国会図書館憲政資料室所蔵『斎藤実関係文書』に内藤湖南の書簡3通が存在していることに気づいたのは、十数年前の中見立夫氏による教示のお蔭である。「日本そして中国の政治家・官僚との交友はよく知られているが、専門家としての影響力が現実の政治に対して、どの程度あったかは疑問である。ただし明治三十九年（一九〇六）に外務省へ提出された「間島問題」に関する調査報告書が外務省記録のなかにある。また満洲国皇帝即位に際しての建議をふくむ書簡が、『斎藤実関係文書』に残されている」と。¹⁾ 同文書の「書翰の部2、1114-2」（1933年12月4日付）について、「『清実録』影印費調達をめぐる羅振玉提案に対する湖南の協力」の関連で分析したことがあった。²⁾ 本稿は、同文書の「書翰の部2、1114-3」（1934年3月25日付）に関する検討であり、その内容はまさに溥儀の満洲国皇帝の即位儀礼問題をめぐる湖南の軍部批判である。³⁾

1 即位時の竜袍着用にとった溥儀——『わが半生』に見る

晩年の溥儀が『わが半生』という自伝に次のように即位前、国務総理鄭孝胥を介した関東軍首脳との駆け引きについて次のように回想している。

一九三三年の十月、（中略）関東軍司令官菱刈隆は、日本政府は私が「満州国皇帝」になることを承認する用意がある、と正式に通告した。

私はこの通知に接すると、まったく嬉しくて天にもものぼる気持だった。私が最初に考えたことは、竜袍を一着準備しなければならない、ということだった。

竜袍は北京の太妃のところから取り寄せた。ところが関東軍は、日本が承認したのは「満州国皇帝」であって、「大清皇帝」ではない、したがって私は清朝の竜袍を着てはいけなく、関東軍の指定する「満州国陸海空軍大元帥正装」を着ることができるだけだ、と言った。

「そんなバカなことが」私は鄭孝胥に言った。「私は愛新覺羅の子孫だ。祖先の制度を守

1) 中見立夫氏執筆項目「内藤湖南」、伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』（吉川弘文館、2004年）、288頁。

2) 陶徳民・藤田高夫「内藤書簡研究の新しい展開可能性について——満洲建国後の石原莞爾・羅振玉との協働を例に——」、関西大学『東西学術研究所紀要』第47輯、2014年4月1日。

3) 同書簡について、複写物はただ3月25日と記載しているが、内容は即位後の議論なので、1934年3月25日付と判断した。ちなみに、「書翰の部2、1114-1」（1933年10月11日付）の書簡は日滿文化協会創立のための渡満の前、「書翰の部2、1114-2」（1933年12月4日付）「書翰の部2、1114-2」（1933年12月4日付）は渡満の後の斎藤首相へ宛てたものである。前者は懸念と依頼を伝える、後者は渡満結果を報告する性格がある。

らないなどということがどうしてできようか？ それに北京の覚羅一族にすべて来てもらうのに、私が洋服を着て即位したのを見せられ、どういうことになる？」

(中略)

「交渉に行ってくれ」

鄭孝胥が出かけたあと、私はひとり榮惠^{ロンホイ}太妃が二十二年間保存していた竜袍を鑑賞していた。心のなかに感慨があふれてきた。これは光緒帝が着たものだ、本当の皇帝の竜袍なのだ。これこそ私が二十二年間思っていた竜袍なのだ。私はかならずこれを着て即位せねばならない、これが清朝再興の出発点だ。……

私の頭の熱がさめないうちに、鄭孝胥が帰ってきた。彼は、関東軍は即位のとき元帥の正装を着なければならぬと言いつ張っている、と報告した。

「お前は交渉しなかったのか」

「とんでもございません。これは板垣（征四郎）がみずから臣に申したのでございます」

「そんなバカな！」私はとびあがった。「即位の前には天に報告する礼を行わねばならないのだぞ。私は元帥の服を着て叩頭して天を祭れとでもいうのか？」

「もう一度板垣に話してまいりましょう」。

(中略)

一九三四年三月一日の早朝、長春郊外の杏花村^{シンホワツン}において、土盛りした「天壇」の上で、私は竜袍を着て即位を天に報告する古式の礼を行なった。それから、帰っていわゆる大元帥の正装に着替え、(勤民楼で)「即位」式を挙行した。(後略)

その日、勤民楼の大広間には真紅の絨毯が敷かれ、北がわの壁の根もとには絹の幕で神座ふうの場所がしつらえられ、そこに特別製の背の高い椅子が置かれた。それには蘭の花の紋、いわゆる「御紋章」が彫られていた。(中略)「総理大臣」鄭孝胥をはじめとする文武百官が並んで私に三度鞠躬の礼をし、私は半鞠躬の礼でこれに答えた。つづいて日本大使菱刈隆が私に国書を手渡し、祝賀を述べた。これらの儀式が終ると、北京から来た愛新覚羅一族の者(載・溥・毓の字のつく世代の者はほとんど全部来た)とともに内務府にいた者が私に三跪九叩の礼〔三度ひざまずいて九回叩頭する礼〕を行なった。もちろん、私は椅子にすわったままその礼を受けた。⁴⁾

4) 愛新覚羅・溥儀著、新島淳良・丸山昇訳『わが半生——「満州国」皇帝の自伝』(株式会社大安、1965年)、25-29頁。

2 溥儀側と関東軍の確執の背景——『キメラ—満洲国の肖像』に見る

山室信一氏が『キメラ—満洲国の肖像』における「菊と蘭—帝制満洲国と天皇制の輸入」という節に、次のように「康德帝」溥儀の即位儀礼の一つとしての「郊祭の儀」の様子を描いている。

一九三四年三月一日午前八時半、首都新京郊外杏花村の順天広場に設けられた天壇に登った溥儀は、天命を受けて即位したことを天に報告する告天礼（告祭）を執り行なった。晴天ながら摂氏零下十二度、強い南西風が吹きすさぶ中、前後両肩に金龍の刺繍をした龍袍^{ロン}を着、頂上に紅色の房と真珠飾をつけた皮縁取りの円形帽をかぶり、鹿皮の深沓^{ふかぐつ}をはくという清朝の礼装によって告天礼を含む郊祭の儀を終えた溥儀は、急ぎ帝宮へ帰った。⁵⁾

そして、その儀礼挙行の背後にあった溥儀側と関東軍側との確執を下記のように鋭く分析している。「関東軍や日本政府にとって帝制採用の課題は、いかにしてそこから清朝復辟という性格を払拭するかにあった。他方、溥儀や鄭孝胥らにとって唯一、最大の関心事はひとえに帝制採用を清朝の祖業回復としていかに実現するかにかかっていた。そして、この問題での対立の焦点が即位にあたって着用する衣装の問題として表面化したのである。溥儀らは皇帝即位の礼服としての龍袍を着ることを頑強に主張し、関東軍は溥儀の帝位は清王朝の復活ではなく満洲帝国の創出であることを示すため満洲国陸海空軍大元帥の正装によって即位することを言い渡した。しかし、溥儀らは龍袍の着用を要求して譲らず、両者の駆け引きと妥協の結果が、龍袍による郊祭の儀と大元帥正装による登極の儀を併せて行なう形式となったのである。そして、愛新覚羅一族と清朝旧臣による三跪九叩の礼を受けたことによって康德帝としての即位を清朝復辟と解したかった溥儀の要求をひとまずは満たした形となった。だが、公式には溥儀の即位が清朝復辟ではないことは一貫して主張され、鄭孝胥でさえ「帝制実施総理声明」においてもそうはっきりと言明せざるをえなかった。⁶⁾

3 溥儀に対する湖南の評価——『大阪毎日新聞』（1934年1月21日付）に見る

上述したように、満洲国「執政」の溥儀に対して、関東軍司令官菱刈隆が「満洲帝国皇帝」

5) 山室信一『キメラ—満洲国の肖像』増補版（中公新書、2004年）、221頁。

6) 同上、223頁。

承認に関する正式通告を行ったのは、1933年10月のことであった。湖南はちょうど、同月に日満文化協会創立のために渡満したので、この情報をいち早くキャッチしたようだ。1934年1月21日付の『大阪毎日新聞』に「國家創立當時から事實上既に皇帝 今日この結果は寧ろ當然親み深い執政の人徳」と題する湖南の文章が発表され、中には次の一節がある。

自分は昨年秋新京（長春）まで行つた。國情とか民論とかいふものについては何ら視察する暇がなかったが、一部有識者からはしばしば帝政問題についての意見を聞く機会があった。（中略）満洲国の大官たちもお互いの間で話をするには勿論執政皇上として話をする、われわれに對して話すときでも改まつた挨拶のほかは、みんな皇上といつてゐる。ただ通譯する人が皇上を執政と翻譯して話すのだが、こちらで聞いてみるとちよつと滑稽なほどであつた。⁷⁾

そして、「我々は文化事業のことで満洲へ行つたのだが、さういふことについても大變同情を持ってをられ、日満文化協会を組織したのだからその総裁に仰ぐと申し上げたら心から喜ばれた」ことや、「書経」を愛好され、なかにも無逸篇を好まれて自ら無逸齋と称してをられる」ことなど謁見時に伺つたお話を裏付けとして、次のように溥儀のことを後漢時代の光武帝に擬して高い評価を与えている。

支那でも歴代の君主の中に國家を中興した有名な天子は數多い。その中で中興の名主といはれるのは後漢の光武帝であるが、執政は光武に類似した性情を大分もつてをられる。學問好きな優雅な點、よく人を信任する點、そのほかにも功勞のある人を勞^{いた}はる點などが皆類似してゐるのである。光武帝はその境遇上自ら非常に難儀な戰爭をして、しばしば危い目に遇つて功業をとげたのであるが、執政はまだ大きな戰爭をされたことがない。これが違つてゐるだけだが、しばしば危難に瀕されたことは多少類似の點がある。北京におるでの時宮中から日本公使館へ逃げこまれたり、北京から微行して天津へ落ちられたり、天津からさらに轉じて満洲國創立に當つても容易ならぬ御心勞があり、さういふことで相當に危難を経験されるなど人生の艱難辛苦^なを嘗めてをられる。新らしい國家の事實上の創業の君主としても、恐らく不適當なことは少しもないであらう。⁸⁾

7) 「國家創立當時から事實上既に皇帝 今日この結果は寧ろ當然 親み深い執政の人徳」、内藤湖南研究会編『内藤湖南 未収録文集』（河合文化教育研究所、2018年12月）所収、538頁。

8) 同上、539頁。

4 軍部の不学無術を批判した湖南——斎藤宛て書簡（1934年3月25日付）に見る

しかし、上記の関東軍首脳などとの確執がもたらした溥儀、鄭孝胥および羅振玉の不满と反発の本音は、何らかの形で湖南の耳に入り、湖南は即位式の三週間後に斎藤実首相に次のような書簡の形で伝え、軍部の不学無術ぶりを厳しく批判した。

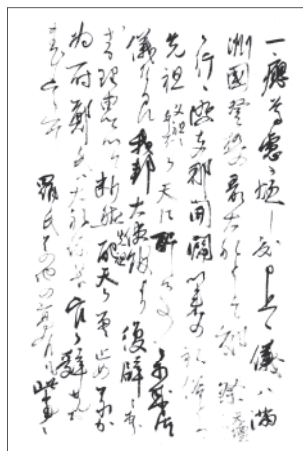
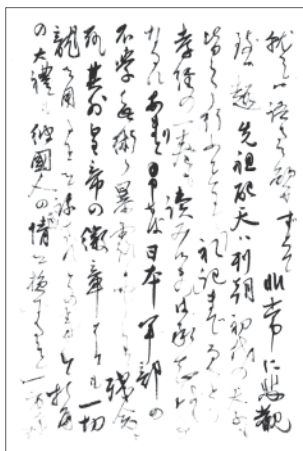
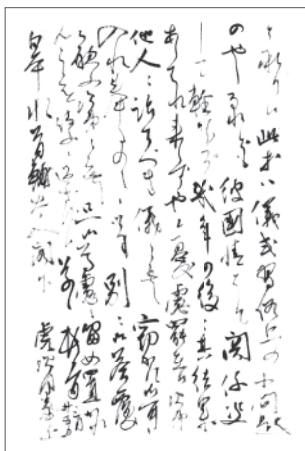
日滿文化協會の件ハ、慶賀の儀ハ、例の
 事進行を因り居候。滿洲國帝政
 も首尾克成立、鄭蘇戡修好
 使の来朝と相成、兩國之為、慶賀之事
 二奉レ存候。然ルニ、此二仄聞する所ニテ、甚
 將來之為、杞憂二不堪御事有レ之。或ハ
 已ニ鈞聰ニ達し居候やも知れず候得共、

肅啓、追々暖和之候と相成候処、過
 般の御不例もめでたく御平復と拝、
 御健勝にて甚務御快掌被レ遊候趣、
 乍レ藤奉ニ欣賀一候。小生事ハ、旧臘拜
 芝以後、健康とかく相すくれず、先月
 京都大学にて衆医博合診の結果、
 胃潰瘍と申事に決定、其後静養
 致居候。至極輕症にて苦痛ハ無ニ御坐一候ハ、

京都府相楽郡
 瓶原村
 内藤虎次郎

東京市四谷區仲町
 三丁目（要存）
 子爵齋藤実殿閣下
 親披

東京市四谷區仲町
 三丁目（要存）〔齋藤のメモ〕
 子爵齋藤実殿閣下
 親披
 京都府相楽郡
 瓶原村
 内藤虎次郎
 肅啓、追々暖和之候と相成候処、過
 般の御不例もめでたく御平復と拝、
 御健勝にて甚務御快掌被レ遊候趣、
 乍レ藤奉ニ欣賀一候。小生事ハ、旧臘拜
 芝以後、健康とかく相すくれず、先月
 京都大学にて衆医博合診の結果、
 胃潰瘍と申事に決定、其後静養
 致居候。至極輕症にて苦痛ハ無ニ御坐一候ハ、
 回復之遅々たるは致方も無レ之、例の
 日滿文化協會の件ハ、慶賀の儀ハ、例の
 事進行を因り居候。滿洲國帝政
 も首尾克成立、鄭蘇戡修好
 使の来朝と相成、兩國之為、慶賀之事
 二奉レ存候。然ルニ、此二仄聞する所ニテ、甚
 將來之為、杞憂二不堪御事有レ之。或ハ
 已ニ鈞聰ニ達し居候やも知れず候得共、



と承り候。此等ハ儀式習俗上の小問題のやうなれども、彼国情として関係決して軽からず、幾年の後ニ其結果あらはれ来らずやと憂慮罷在候次第、他人ニ話すべき儀ニ無レ之、窃かに御耳ニ入れ奉るのミニ御坐候。別ニ御答覆を願ふ次第ニ無レ之、只御尊慮ニ留め置かれんことを請ふニ過ぎず候。草々 頓首三月廿五日 日本邦首相大人閣下 虎次郎奉上

就てハ語るニ預せずとて、非常に悲觀致候趣、先祖配天ハ列朝初代の天子も皆之を行ふことにて、「礼記」までなくとも孝経の一卷も読み候ものは承知致候事なるに、あまりと申せば日本軍部の不学無術を暴露候やうにて残念ニ存候。其外、皇帝の徽章としても、一切龍を用ふことを許さずとの事にて、折角の大礼も彼国人の感情を損すること一方ならず

一応尊慮を煩し度、申上候儀ハ、滿洲国登極の最大礼として郊祭天壇にてを行候際、決支那開闢以来の礼俗として、先祖太祖ニあらずを天に配し候事ニ相成居候儀なるに、我邦大使館より復辟ニあらざる理由を以て断然先祖配天を差止め、それが為、一時鄭氏ハ大札使長官を辞せんとまで言出し、羅氏その他の高官も此事ニ

要するに、湖南の杞憂は明らかに、『礼記』や『孝経』に由来する中国伝統的天子祭天の儀礼を全然知らず、配慮もしなかつた軍部の武断は結局、満洲における中国官民の感情を害し、今後の日満関係の構築と維持に悪影響を及ぼすことにあった。

1972年6月23日、『内藤湖南全集』が刊行されている途中、東方学会が京都のプリンスホテルで湖南の生涯と学問を回想する座談会を開いたことがあり、会合の最後に湖南の弟子貝塚茂樹が晩年の湖南に関するエピソードを披露した。ある宴会の席で王道国家としての満洲国に対する矢野仁一の賛美論を聞いた途端、その論調を痛烈にやっつけた。要するに、「先生は現実を知らない、空想論、理想論は大嫌いでした。もちろん、思想のよくわかる先生のことですから、理想論は理想論として評価されます。しかし、手放しの賛美論に与されなかつた。満洲国の前

途については、けっして楽観されているはずがない。そういう満州国ではあるが、文化的にいいことをせめて後世に残させてやりたい。そういうのが先生の真意ではないか。先生は昔からたいへんな軍部嫌いでしたから」と。⁹⁾ 斎藤首相に宛てたこの湖南の書簡はまさにその重要な一例であったと言えよう。

しかし、書簡中に書かれている「満洲国帝政も首尾克成立、鄭蘇戡修好使の来朝と相成、兩國之為、慶賀之事ニ奉_レ存候」という文言には、帝政施行後の鄭孝胥総理の修好使としての来訪を数日後に控えているため、これを好機に首相をはじめとする日本側の周到な接待より、満洲国側の要人の気持ちを慰めるようにという忠告の意図が込められていると考えられる。

事実、鄭氏の行程は3月24日の門司入りから4月24日の門司出帆まで一か月にわたり、訪問の先々で極めて丁寧で、時には盛大な歓迎を受けていたようである。その日記によれば、3月26日九時東京駅到着の際に「宮内大臣湯淺、外務大臣廣田、式部長官林權助、東京市長牛塚、東京府知事□□」などによる出迎えを受け、宮中の馬車で迎賓館となっている帝国ホテルについた。休憩後、鄭氏は接待員黒田子爵の案内により、大宮御所、秩父宮、閑院宮、伏見宮に「記名」の形で、斎藤首相および各大臣には「投刺」（名刺を差し出すこと）の形で表敬訪問した。¹⁰⁾

翌27日、昭和天皇と皇后様が宮中で、斎藤首相が官邸でそれぞれ歓迎宴会を設けたことや明治神宮、靖国神社への参拝について、鄭氏が次のように記している。

九時、入宮謁日皇及皇后；午刻、賜宴於豊明殿。各大臣皆來答拜。斎藤総理大臣設宴於官邸、政府諸大臣皆在座。晤平沼、荒木。詣明治神宮、靖国神社致礼。¹¹⁾

4月5日東京から離れる際、「自内閣総理斎藤以下多來送、永井、廣田、芳澤、松岡送至車側」と、斎藤首相は帝国ホテルで、大臣など数名は東京駅のホームまで見送ることになった。¹²⁾

一方、4月9日、鄭氏が奈良県に隣接する京都府南部瓶原村の恭仁山莊を訪ね、湖南と歓談したが、その様子を日記で次のように詳述している。

九時、與水野（梅暁）、白井、小七（鄭氏の長男鄭垂——筆者）同乘汽車至瓶原，所過村民出迎者甚多。内藤力疾自出門外，其夫人及四子、一女、三門生皆出見，談一時許。門内懸

9) 吉川幸次郎編『東洋学の創始者たち』（講談社、1976年）、114頁。

10) 中国国家博物館編・勞祖德整理『鄭孝胥日記』第五冊（中華書局、1993年）、2515頁。

11) 同上。

12) 同上、2517頁。

顧亭林書扇，齋中懸宋畫孔子及三弟子像；贈影宋《尚書正義》一冊，以莫子偲所藏唐寫《說文》卷求題其後，此卷嘗與弢庵同觀於匋齋南京督署者。所居名恭仁山莊。¹³⁾

すわなち、鄭氏は湖南とその家族全員、門下生三人および大勢の村人の歓迎を受けた。門内に明末清初の学者顧炎武が書いた扇面、書齋には宋時代の絵画である孔子と三弟子の像が掲げられている。そして、宋時代に刊行された『尚書正義』の影印本を恵贈され、唐時代の写本『説文解字木部残卷』の巻末に題辞を要請された。後に国宝に認定され、現在は公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋に架蔵されているこの天下の名品は、鄭氏が清末の際、福建省の同郷である陳宝琛（号は弢庵、辛亥革命後は溥儀の師傅すなわち侍講を担当）と一緒に、当時の両江総督を務めている端方（号は匋齋）の南京官邸で拝見したことがあった、と。

この日記に、「内藤力疾自出門外」と、胃がんを患えている湖南が病弱な体を顧みずに、山莊の玄関外に出て迎えてくれた感動的場面も特筆している。二か月後の6月26日、湖南は闘病の末に他界し、『説文解字木部残卷』の巻末における鄭氏の題辞もこの名品上の最後の名人題辞となった。

〔謝辞〕 本稿は科学研究費補助プロジェクト（基盤研究B）「大正期日本の中国研究と第一次世界大戦前後の世界——内藤文庫所蔵資料を中心に」（代表：陶徳民）による研究成果の一部である。なお、書簡の解説は内藤湖南顕彰会会員高木尚子が行ったものであり、記して厚く御礼申しあげたいと思う。

13) 同上、2518頁。これについて、拙稿「鄭孝胥与水野梅曉的交往及其思想初探——以霞山文庫所蔵《使日雜詩》卷軸為線索」、関西大学『中国文学会紀要』第26号（2005年）参照されたい。



図1 「満洲国執政」溥儀の就任式（1932年3月1日）。
偽滿皇宮博物館編『偽滿洲国旧影—記念「九・一八」事変七十周年』（吉林美術出版社、2001年）より転載。

図2 日滿文化協会設立の際の記念写真（1933年10月17日）。前列左より宝熙、鄭孝胥、服部宇之古、溥儀、内藤湖南、濱田耕作、羅振玉；後列左より袁金鎧、水野梅暁、林出賢次郎、1人おいて羽田亨、池内宏、溝口審査官

広中一成・長谷川怜・松下佐知子編著『鳥居観音所蔵水野梅暁写真集』（愛知大学東亜同文書院大学記念センターシリーズ、社会評論社、2016年）より転載。



図3 「龍袍」姿の溥儀が「祭天の儀」を執り行うため、新京郊外に設置されている天壇に向かって出発する風景（1934年3月1日）
太平洋戦争研究会編『図説 満洲帝国』（河出書房新社、1996年）より転載。



図4 本物の子牛が祭天の供え物として用意されている天壇。出典同図3

図5 天壇の入り口で溥儀の到着を待っている鄭孝胥（左端）や羅振玉（左より3人目）などの側近たち。
羅繼祖『我的祖父罗振玉』（百花文芸出版社、2007年）より転載。



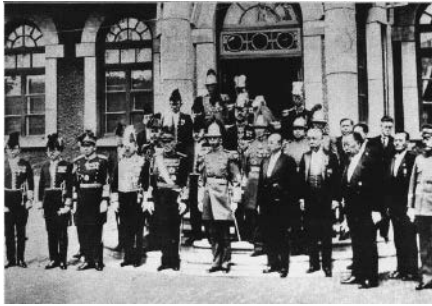


図6 満洲国陸海空軍大元帥の正装による「登極の儀」(1934年3月1日、溥儀の左側は菱刈大使兼関東軍司令官)。出典同図3



図7 正装姿の満洲帝国皇帝溥儀。出典同図1



図8 蘭花の模様が飾られている宮廷府(「執政」時代は勤民楼と呼ばれていた)。出典同図3



図9 満洲帝国修好使をつとめる鄭孝胥総理が内藤湖南の恭仁山荘を訪れ、湖南の依頼で唐写本『説文解字』木部残巻の巻末に題辞する風景。(1934年4月9日 後方左は鄭氏の長男鄭垂、右は湖南の長男乾吉) 関西大学図書館内藤文庫所蔵

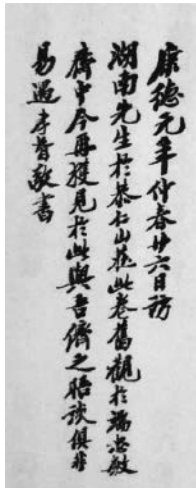


図10 鄭孝胥の題辞内容 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵唐写本より



図11 齋藤実総理の肖像。国立国会図書館(近代日本人の肖像)より



図12 内藤湖南の学識を褒める溥儀の題辞。出典同図9

図13 満洲国の首都新京で行われた故内藤湖南追悼会(図12溥儀の題辞が湖南の遺影の上方に飾られている)。出典同図9



